



## 年間第 14 主日 (マルコ 6:1-6)

イエスの向こうに働く神を知り信仰告白する

年間第 14 主日 B 年は、「ナザレで受け入れられない」という場面を取り上げます。イエスが生まれ故郷のナザレの人々に受け入れられないのは、ナザレの人々がイエスの素晴らしい業を目にして驚いた後に、イエスの業を何に結びつけようとしたかに原因があります。ナザレの人々の過ちを繰り返さず、わたしたちがイエスを受け入れるために必要なことは何か、考えることにしましょう。

今年参加した司祭黙想会を指導した大木神父さまの説教は、とても分かりやすく、堅苦しさのまったくないものでした。大木神父さまは、今回の黙想会で手痛いミスを犯したことまで率直に話してくれました。

最後の説教の時でしたが、生活している伊万里の修道院から長崎に出発する際に、今回の黙想会のために用意した原稿をお忘れになったそうです。大まかなことは頭にあったでしょうが、なるほど原稿を忘れていたのを悟られないように話していたのだなと思うと、難しい話を持ち出さなかったのが納得できました。

けれども内容を落とすようなことがなかったのはさすがイエズス会士だなあと思ったのです。その中で「黙想会は車検のようなものです」と仰っていたのが印象的でした。

車検で車を修理工場に預けて故障箇所を見つけ、部品を交換したり動きの悪い部分を調整したりするように、ふだんの生活の場所から黙想会に出向いて自分の直すべき部分を探し出し、考え方を思い切って取り換えたり、調整したりする。そうやって毎年、自分と真摯に向き合う時間ですと黙想会の意義を説明してくれたのです。

毎年、ふだんの生活を横に置いて自分と向き合い、司祭としての価値はどこからきているのか、そもそも司祭職とは何なのかを問い続ける。ふだん忙しさの中でじっくり考えることができないので、黙想会の期間はとても大切です。そして、毎年毎年問い続けることも大切です。

問い続けることがなぜ大切かという、問いかけをやめたときから、自分に都合のよい答えや、都合のよい受け止め方を探そうとするようになるからです。司祭としての価値は、本来イエス・キリストから来ますが、問い続けることをやめてしまうと、たとえば司祭としての価値をわたしが果たしてきた活動の多さや、勤めてきた年数や、影響を与えた人の数や、そうしたことで計ろうとするかもしれません。

司祭としての価値はそういう業績ではないと思います。以前の説教で触れましたが、司祭になって 1 回だけしかミサをささげずに死んだとしても、その 1 回のミサだけでも司祭であった価値があるのです。すると、やはり毎年、司祭としての価値はどこから来るのか、そもそも司祭職とは何なのかを問い続ける必要があるのだと思います。

さて、福音朗読でイエスの素晴らしい業を目にした人々は驚きの声を上げます。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。こ

の人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。」(6・2) イエスの素晴らしさはどこから来ているのか、イエスとはいったい何者なのかを問うているわけです。

しかし、人々のたどり着いた答えは、問い続けることをやめた答えでした。「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」(6・3) 人々はイエスの業の向こうに働く神の力を見ようとはせず、イエスをただの人として引きずり降ろすことに心が向いたのです。

わたしも、神さまが働くかどうかではなく、その人の出身や人間関係で計られた経験があります。中学校から神学校に入り、最初の夏休みに日曜日のミサに来た時に、大人の人たちがわたしの話をしていました。「輝あんちの息子の神学校に行ったってや。なんのそん、輝あんちの息子の神父さまにならうとっちかよ。」父親の輝明が若いころにやんちゃであったことは聞いていましたので、わたしには言い返す言葉はありませんでしたが、心の底から見返してやろうと思ったことは確かです。

そんなわたしを通してでも神さまは働きました。イエスの業はどこから来ているのか、イエスとはいったい何者か、辛抱強く問い続ける必要があります。たとえば母マリアは、わが子イエスにまつわる様々な出来事を心の中で思い巡らし、その意味を深く問い続けました。しかし当時の人々は問い続けることをしませんでした。

わたしたちも、当時の人々の過ちを繰り返してはいけません。わたしたちにとって問い続ける価値あるものがいくつもあります。イエスとは一体どなたですかという問いもそうですが、ほかにも祈りとか、秘跡についても問い続ける辛抱強さが必要ではないでしょうか。祈りの価値はどこからきているか、そもそも祈りとは何なのか。洗礼・聖体・罪のゆるし・結婚の秘跡の価値はどこから来ているのか、そもそも秘跡とは何なのか。恵みのたびに問い続ける必要があります。

問い続けると、恵みの出所がどこなのかよくわかるようになって、もっと祈りや秘跡を大切にできるようになるでしょう。問い続けることをやめると、いくら祈っても聞き入れられないとか、これこれの秘跡の恵みは小さいころさんざん受けたのでもう要らないとか、恵みを間違った答えに引きずり降ろしてしまうのです。

わたしが、神から受けている恵みや、秘跡などを通して受けている生き方について、これからも機会あるごとにその出所を問い続ける人でありたいと思います。見えるものを通して見えない神の働きに目を向け、感謝できる人になれるよう、このミサを通して取り組む力を願いましょう。